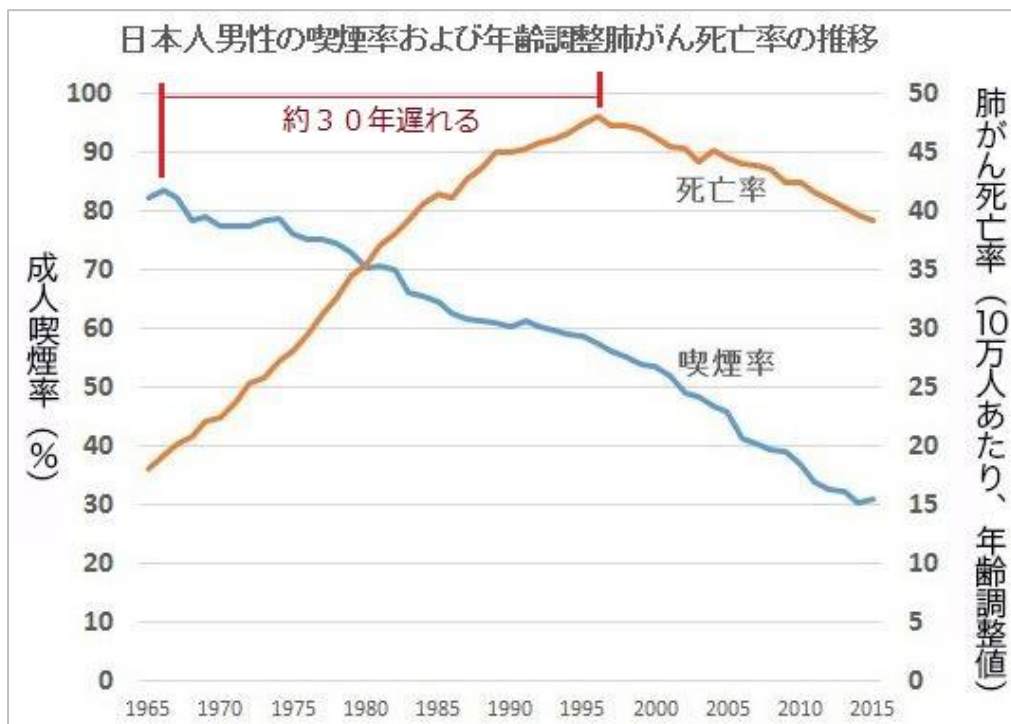


週刊 **タバコの正体**

年が明けて平成30年(2018年)が始まりました。新しい年を迎えましたが君たちにとっては、これから始まる3学期は学年を締めくくる最後の大切な時期です。3年生は卒業、1・2年生は進級に向け気分も新たに精一杯、努力をしてほしいと思います。



朝日新聞医療サイト「アビタル」から

さて、今年「平成」となって30年目を迎えました。30年という期間は十代の君たちには実感が湧かないでしょう、でも昭和生まれの皆さんの親世代には、「もう30年たったのか」と感じる人も多いと思います。

そこで、左のグラフを見て下さい。これは50年前から現在までの、男性の喫煙率(左

側の目盛)と肺がん死亡率(右側の目盛)を示しています。50年前(1965年)の喫煙率は、なんと80%を超えていました。今では信じられませんが、ほとんどの男性は喫煙者だったのです。しかし、タバコの有害性が世間に浸透するにつれ毎年喫煙者が減少し、2015年には30%にまで低下しました。その結果現在では、大半の大人がタバコを吸いません。

ところが、もう一方の肺がん死亡率のグラフは、50年前より現在のほうが高くなっています。肺がんの大きな原因でもある喫煙率が下がっているのに、肺がん死亡率が高くなっているのはどうしてでしょうか。

じつは、タバコを吸って肺がんが発症するまでには、相当長い期間が必要です。一般的に「一日の喫煙本数×喫煙年数」が400を超えると、がんが発生する危険性が高くなると言われています。例えば毎日15~20本の喫煙者では、20~30年で肺がんになる確率が高くなるわけです。この関係を意識して上のグラフを見直して下さい。喫煙率が下がり始めた30年後に肺がん死亡率が下がり始めているのが分かりますよね。

30年は平均的な親子の年齢差に相当します。つまり、タバコの影響は子どもが親になる頃に現れるわけです。君たちの世代がタバコを吸わなければ皆さんの子ども世代には、さらに健康的な社会ができていくことでしょう。